巻　頭　言

2021年度臨床心理学コース紀要担当教員　野　中　舞　子

この度第45集東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要が無事に公刊されました。本紀要は１年に１回発行されるものであり，学生が中心となって，執筆・編集の作業は進められます。45年という節目の年に担当教員を務める貴重な機会をいただきました。

昨年度の巻頭言を読ませていただき，新型コロナウイルスの感染拡大の経緯が能智教授により丁寧にまとめられていました。そこから１年たった現在も，新型コロナウイルスを巡る社会情勢は学生生活に強く影響していることを痛感し，苦境においても実践活動・研究活動に取り組む学生の姿をたくましく思います。かつてはこの紀要を封入・発送する作業は１つの部屋にたくさんの学生が集まって，上級生・下級生隔たりなく，いろいろと他愛無い話をしながら数時間かけて行い，なんとなく「つながり」が形成されていたものでした。これはあくまで１つの例であり，多くの学生が一堂に会するという機会はコロナ禍で減ってしまいました。では，学生たちはどのようにこの環境の変化を乗り越えているのかというと，オンラインの新しい交流ツールを用いて，とても柔軟に新しい形の「つながり」を作り出しているように思います。その成果の１つとして，本紀要に掲載している論文は位置付けられるのではないでしょうか。

第45集紀要は２つの意味で節目となる紀要になるのではないかと個人的には思います。まず，長年本学に務められ，臨床心理学という学問の確立に貢献されてきた下山晴彦教授が退官される年の紀要となりました。下山教授が我が国の臨床心理学を，社会からの説明責任を果たす専門職が学ぶ学問として発展されてきたことは誰もが認めることだと思います。下山教授から学んだことをただ引き継ぐというわけではなく，東京大学として，今後臨床心理学をどう発展させていくべきか，考えていくことが残された教職員・学生の務めだと思います。もう１つ，本年度から紀要をオンラインでも公開することとなりました。長引くコロナ禍において，大学教育においてもICT化が著しく進みました。紀要をオンライン化することで，来講することができない全国の研究者の皆様，心理職の皆様，学生の皆様に，本紀要に掲載されている論文に目を通していただけるのではないかと思います。オンライン化の影響もあってか，本号は研究論文のみの掲載となり，ケース研究の掲載はありませんでした。個人情報の保護と情報公開のバランスをどうとるべきか，継続的に議論・検討をしていきたいと思います。

もし本号に掲載の論文にお気づきのことがございましたら，忌憚なき御意見をいただければと思っております。各論文は学生がその意義を熟考の上，指導教員の指導の下，しっかりとまとめたものです。多くの読者の御意見をいただき，自己研鑽に励むことで，将来的にはその領域で各々が臨床家として，研究者として，リーダーシップを発揮できる存在へと成長していけるようにと担当教員としては願っております。